

# 十段物語



## 第9回

実業界から柔道普及に貢献 しょうりき まつたろう 正力 松太郎

本橋 端奈子

剣道・野球に熱中した中学時代



正力松太郎十段

正力松太郎は明治18（1885）年4月11日、富山県射水郡枇杷首村に生まれた。正力家は祖父の代から土建業を営み、名字帯刀を許されるほどの家であった。父庄次郎は、家から臨める土手に生繁る老松を見て、その忍耐力や生命力にあやかろうと「松太郎」と名付けたという。ただ、生まれつき虚弱体質で、蓄膿症と中耳炎の持病を抱えており、幼少のころからよく高熱を出す子供であった。そんな正力を心配して、父庄次郎は

正力にスパルタ教育を施す。15歳になり県立高岡中学校へ進学すると、家から8キロ先の学校までどんな雪の日も地下足袋で歩いて通わせ、また学業はそこそこに水泳や剣道を奨励し、体を鍛えることに専念させたのであった。正力は高岡中学で父の奨め通り水泳に剣道に打ち込み、また3年生になる頃には野球をも始め、「雄球団」という自前のチームを作るほどに熱中したという。

4年生19歳の頃、高岡中学で生徒による教師辞職を求めるストライキがおこった。ちょうど伯母が亡くなったため、しばらく学校を休んでいた正力が久しぶりに登校すると、校内はかなりの騒ぎになっており、正力も求められるまま深く考えることなくストライキの盟約にサインをし、仲間に加わることとなった。ところが、200名以上いたはずの同志は、親に叱責され学校から退学と脅され、

怖くなったのか、日を追うごとに150名、100名、50名と減っていつてしまったのである。結局10名余りにまで減り、学校側と会合を重ね最後は説得されてストライキは解散となった。

正力は、深く考えず誘われて雷同してしまったことではあるが、一度誓った盟約を破るまいと最後までストライキを先導しつづけた。その結果、正力を含む首謀者4名は数か月の停学処分を課せられ、操行点を一番下の丁に落とされることとなった。当時は操行点が何より優先され、いくら勉強ができてても操行点の順に成績を付けられたという。このため、正力ら4名は卒業まで席次の末尾4席を占めることとなった。このストライキ事件について、正力は、軽拳妄動であったとしても盟約を最後まで守り、ストライキに参加しつづけた自身の愚直さに満足していると、後に振り返っている。正力の頑迷なま

での意志の強さが、この頃から既に垣間見えるであろう。

### 人生最良の日

明治36（1903）年、正力は金沢にある第四高等学校<sup>5</sup>に入学する。

この四高では、専ら柔道の稽古に専念した。何故柔道を始めたのかというと、北陸地方は雪・雨が多いため、屋外スポーツよりも屋内で行う柔道や撃剣が盛んであり、また、正力自身は護身術を身につけたいと強く思っていたためである。柔道は正課としてもあったが、更に柔道部に入学し、放課後になると毎日道場に通って稽古に没頭した。生涯の友となる品川主計<sup>6</sup>などは、この柔道部の朋友である。

この四高時代、正力には生涯忘れない思い出がある。それは、京都第三高等学校・岡山第六高等学校との対抗試合である。嘉納師範はよく

「対抗試合から愛校心が生まれ、愛校心から愛国心が生まれる。ゆえに対抗試合は大いに奨励すべきものである」と述べていたという。まさにその精神に則り、明治40（1907）

年4月、日清・日露戦争のため長らく中止されていた三高との対抗戦が京都において復活開催されることとなった。六高も加わり、三校対抗で柔道・剣道・野球・庭球の勝敗を争うのである。この大催事に、金沢の街は大変な騒ぎとなった。四高弁論部は演説会を開いて選手らを激励し、京都まで選手ら80人近くの旅費のため市民らは募金を行い、はては士気を鼓舞するための応援歌まで作られるほどの盛り上がりであった。この時作られた応援歌が今も歌い継がれる「<sup>ただ</sup>血を盛る<sup>かみ</sup>鬘ならば 五尺の男児要なきも 高打<sup>た</sup>つ心臓の陣太鼓<sup>ね</sup> 魂の響きを伝えつつ 不滅の心理戦闘に 進めと鳴るを如何にせん」

で始まる「南下軍の歌」<sup>12</sup>である。正力らは、京都に赴任していた永岡秀一七段<sup>13</sup>をわざわざ招聘して、2週間の集中特訓を行った<sup>14</sup>。そして京都への出発前夜、80人近くの選手一同は講堂に集まり、皆で必勝の水杯を交わし、試合で負けた者は頭を丸め髭を剃るといふ誓いを立てたのであった。悲壮感すら漂う壮行会である。また、北国新聞が1面の社説を以って、彼ら南下軍の出発に花を添えた。

南下軍の出発を送る

我第四高等学校の運動部(略)猛然起って、京都なる第三高等学校と一大決戦を試むべく、新たに南下隊を組織し、二百余名の健児一斉に進軍歌を奏して、愈よ明旦征途に上らんとす、壮なりと云ふべき也、  
吾人は今の学生が墮落を憎み遊惰を憂ふ、(略)四高が此壮拳を企てたるは近来の大快事と云ふべく、



四高南下軍の記念写真 前列右から2人目が正力

北国三県の各学校は、今後必ずや此風を望み、翕然として其下流に馳せ参ずるに相違なかるべく、星や董に浮名を流して、花の香に全身を麻痺せしむる自墮落の徒、省みて翻然自覚するに至らば、此行に四高運動部の大気焔たるのみに止まらずして、また学生社会の興

奮剂たりと云ふとを得べく、吾人の之を壮とし之を快として、南下隊のために万歳を三唱せんと欲する所以のもの実に此に存す、

由来北国の野、雨多くして雪多し、屋外運動に自由を得ざるは今も昔に同じ、然れども之を以て直ちに学生の体格を疑い、その發育不健全となすものあらば、之れ其一を知って未だ其二を知らざるものと云ふべく、雪国には雪国の運動あり、風霰雨雪のために其行動を妨げられて、年百年中、四畳半の天地に踞踏するものとなさば、北方強国の名は、三百年前において疾に歴史より抹殺されたるならん、吾人は今之に對して、多くの弁解を費すを要せず、近く旅順要塞戦の奮闘を見れば、北国人の体格は如何に健全にして、能く艱難に堪へ辛惨に打勝ちたるかを、事実の上に証明するを得べく、而かも其勇

気の猛烈なるは、他に比して一頭地を抜くものあるを見るならん、北国の人を以て不健全を云ふものは、蓋し云ふものの誤りなり、南下隊の諸君、諸君は徒らに速く玉ふな、速まりて而して失敗を招く勿れ、戦は正々堂々たるを要す、単に目前の勝を争ふて、其手段の卑劣を顧みざるが如きとあらば、之れ独り南下隊の不面目たるのみならず、並せて四高の不面目なり、石川県下の不面目なり、北国三県の不面目なり、一時の不面目は姑く忍べしとするも永久の汚辱は遂に回復するの機なかるべし、勝敗は兵家の常なり、戦は時に利あらざるとありと、四高の軽重に何等に関係なし、唯其進退にして公明正大ならんには敗ると雖も亦名譽たるを失はざる可し、然れども諸君は多年風雪の裡に在りて、百鍊千鍛を重ねたるもの、之を譬ふ

れば鉄中の錚々たるものなり、相手は所謂る上方贅六たるにおいて、鎧袖一觸之を倒すと易易たるべし、亦何ぞ此辺に顧慮を費すの必要あらんや、行け南下隊の諸君、諸君は京洛の諸城壘を粉砕し、凱歌一声更に馬を東方に進めて、帝都に覇を競はんと希望に堪えへず、吾人は茲に勇ましき吾南下隊出陣の首途を祝して其健全を俤る、

四高の勝利を願うのみでなく、彼らの行動そのものが北国三県の名譽となると述べるあたり、都に對する北国の気概を感じさせられる名文である。四高の戦いが金沢ひいては北国三県民の戦いになっている様子が窺い知れる。

出発当日は、四高の全校生徒教員に金沢駅まで見送られ、正力らは京都へ向け旅立った。しかし、いざ試合が始まってみると、期待に反して1日目の野球、2日目の庭球、3日

目の剣道ともに四高の惨敗であった。もう後が無くなった四高頼みの綱は、最終日に残された柔道試合のみである。正力らは悲壯の面持ちで、しかし必勝の覚悟で試合に臨んだ。だが、三高は京都大日本武徳会のお膝元であり、東京の講道館と比肩するほどの云わば「柔道の本場」である。特に三高の大將・小島友次郎二段は武徳会の三羽鳥と呼ばれるほどの人物で、四高の勝利は望み薄と思われての戦いであった。試合は17人ずつの勝ち抜き戦である。ところが、始まってみると意外にも四高の連勝が続き、四高側7人を残して三高の大將・小島の登場となった。だが矢張り三羽鳥である。四高の、小島の体力を奪おうとする作戦も功を奏せず、小島は4人をあつという間に葬り、遂に三將・正力と小島との試合になった。試合の様子は以下に詳しい。

小島は4人の強敵と戦い、さすがに疲れて来たとはいえ、紅軍大將まで勝ち抜かんとする意気高く、まだ名もない参将正力がごときは歯牙にもかけていない。また正力も、まともに小島と戦っては、到底勝算のないことは知っていたので、昨夜来考え抜いて来た決し捨身の戦法に出ることにした。策を練った正力は小島と組むや、思い切って捨身の巴投に出る。よもやと思っていた小島は虚を突かれて、思わず正力の上にかぶさって来る。正力はさっとかわして小島の脇下から背後にまわるや、送襟絞にはいる。意表をつかれた小島は、あつ<sup>18</sup>という間もなく絞め落とされる。正力は開始早々捨て身の巴投、そして間髪入れず送襟絞をきめた。この時、一瞬の静寂の後、地響きのような歓声があがったという。こうして、四高を悲願の初勝利へと導いたので

あった。この時の地元・金沢の喜びようは尋常では無いほどであった。

金沢に凱旋した四高柔道部員は市民の熱烈な歓迎を受け、特に正力はまさにヒーロー扱いであったという。

地元新聞は盛んにこの試合を書き立て、社前や四高の校門に「正力、驕れる敵将小島を屠る！」と大書した特報を掲げてその勝利を祝った。<sup>19</sup>

正力はこの勝利を、「この勝負で、僕は柔道の試合だけでなく、人生についていささか自得することがあった」と述懐している。<sup>20</sup>それほど思い出深い勝利であったのであろう。

### 新講道館と日本武道館の建設

四高を卒業し、帝国大学へ入学した正力は、念願の講道館へ入門を果す。同40年11月10日、22歳のことであった。その2ヵ月後に行われた明治41（1908）年の鏡開式において初段に昇段していることから、四

高時代に相当の実力を積んでいたことが読み取れる。

講道館においては、三船久蔵四段<sup>22</sup>に教えを乞うた。三船の柔道は、押しても引いても身体が軽く浮いて、到底自分の及ぶところでは無く、その強さは無類であると痛感したという。その強さに奮い立った正力は、本場講道館の猛者たちに揉まれながら修行に励み、同年11月15日に行われた秋季紅白試合で抜群の成績をあげ、嘉納師範から直々に即日二段昇段を受けるのであった。

明治44（1911）年2月に26歳にして三段に昇段した正力は、帝大の独法科を卒業し内閣統計局に勤務、その後大正2（1913）年に警視庁に入り13（1924）年まで11年間勤め上げた。そして、ふとした縁から読売新聞社社長となり、この発行部数5万部に満たない潰れ掛けの新聞社を、発行部数230万を誇る

日本屈指の大会社にまで育て上げる八面六臂の活躍を見せるのであった。柔道を専門に修行することはなくなってしまったが、この間大正8（1919）年には四段、大正15（1926）年には五段と昇段を重ねている。正力は昭和20（1945）年、敗戦によってA級戦犯として巣鴨拘置所に送られた一人であるが、昭和22（1947）年不起訴となって出所するまで、拘置所内では、学生時代に柔道とともに修行をした座禪を毎日組み続けて押し通したという。<sup>23</sup>

昭和28（1953）年、水道橋畔に建つ講道館の老朽化が問題となり、また講道館創立70周年に向けて改築計画が持ち上がった。先年67歳にして七段に昇段していた正力は、この相談を受けると、「世界の講道館である、改築ではなくいっそのこと新築で建て直したら」と発案をする。ちょうど水道橋講道館の土地は、都

の道路拡張計画予定地に当たり土地を大分削られることも分かったので、講道館内でも新天地に建て直そうとの機運が高まってきた。そこで、正力は講道館新築後援会会長となり、みずから土地探しと募金集めに奔走することとなるのである。資金が思



67歳当時の正力（撮影は醍醐敏郎十段）

うように集まらないなど苦労は多かったが、正力は持ち前の粘り強さでこの大役を果たし切り、昭和33（1958）年講道館は、春日町交差点に鉄筋コンクリート7階建ての威容を誇る大本山として、新たにスタートを切ったのであった。<sup>25</sup> 正力はこの功績により、昭和37（1962）年11月17日、講道館創立80周年式典上において特別表彰として九段に昇段する。<sup>26</sup> またその功績を讃え、本館に正力の胸像を置くことも決定した。嘉納履正館長は式典において以下の言葉を読み上げ、正力を讃している。

貴殿は推されて期成会々長に就任せられ終始絶大なる御尽瘁を賜り茲に七階白亜の大殿堂の完成を見ました。この盛業は全日本柔道界の喜びであり貴殿に対する全国柔道人の感謝の念は計り知られないものがあります。本日講道館創立八十周年記念式典に当り、特に講

道館九段を贈り其御功績を表彰し  
胸像一基を作り本館に安置して永  
く貴殿の勲<sup>いさお</sup>しを伝へることに致し  
ます。

正力77歳のことである。

また正力は、東京オリンピック開  
催に向けて日本武道館の建設にも力  
を尽した。ことのはじめは、衆議院  
議員を務めていた正力の許へ国会議  
員柔道連盟会長の就任依頼があった  
ことである。この会長を引き受ける  
際、正力は3つの条件を提示した。  
それは、剣道と一緒の連盟にするこ  
と、中高の正課として武道を行わせ  
るようになること、武道の大殿堂を  
つくることの3つであった。<sup>28</sup>この条  
件を受けて、連盟は発展的に武道会  
館建設議員連盟設立の流れとなり、  
正力はその会長に据えられた。そし  
て日本武道館建設に向け、奔走する  
こととなるのである。天皇からの御  
下賜金や国庫補助金、また一般から

の寄付金により資金を集め、昭和39  
(1964)年の東京オリンピック  
開催まで1年を切った期日からの突  
貫工事をも乗り越え、柿落<sup>かきお</sup>としの東  
京オリンピック大会柔道競技を見事  
成功させたのである。

正力は、これら数々の柔道普及の  
貢献をもって、昭和44(1969)  
年10月8日付で講道館十段を贈られ  
る。柔道専門家以外では初の昇段で  
あった。そして、その翌10月9日、  
84歳でこの世を去った。

生前、国務大臣・読売新聞社社主・  
読売テレビ放送網会長・読売巨人軍  
初代オーナー・原子力委員会初代委  
員長など様々な大役を重任し、偉人  
超人と讃えられる人生を全うした正  
力であったが、晩年になっても彼が  
生涯最良の日として思い起<sup>こ</sup>すのは、  
必ず、四高柔道部として三高に勝利  
した明治40年の若き日のことであっ  
た。毎日の苦しい柔道修行によって

培った力を多方面でも大いに発揮し、  
「我は天才なり」というのは未だ知ら  
ず、我は努力の人と称するは、我を  
知るものなり<sup>29</sup>」を座右の銘としてい  
た正力にとって、まさにその努力と  
智力の結実した忘れ得ぬ日であつた  
のであろう。

\*引用文献は、現代漢字に改めた。

《主要参考文献》

「名士柔道放談(その二)『柔道』第23巻第  
12号(昭和27年12月)

『悪戦苦闘』正力松太郎著 日本図書館セン  
ター発行 1999年

『闘魂 高専柔道の回顧』湯本修司著 読売  
新聞社発行 昭和42年

《その他引用文献・註》

1 現在の富山県射水市

2 『正力松太郎の昭和史』長尾和郎著 実  
業之日本社発行 昭和57年

3 前掲註2参照。地元の庄川にかかる雄神  
橋から名付けたチーム名だという。

4 生活態度等の評価点

5 金沢大学の前身のひとつ

- 6 内閣官僚、元読売ジャイアンツ球団社長
- 7 京都大学の前身のひとつ
- 8 岡山大学の前身のひとつ
- 9 『世界柔道史』丸山三造著 恒友社 昭和42年
- 10 六高は柔道競技にのみ参加
- 11 『闘魂 高専柔道の回顧』湯本修司著 読売新聞社発行 昭和42年
- 12 金沢から京都へは南に下る旅程となるため、「南下軍の歌」という
- 13 後の講道館柔道十段
- 14 「南下軍」品川主計著『高専柔道と私』高専柔道技術研究会編集 昭和60年
- 15 北国新聞 明治40年3月29日
- 16 講道館からは磯貝一十段・永岡秀一十段をはじめ、多くの柔道家が教授・教師として赴任している。
- 17 「第四高対第三高等剣柔勝負」『武徳誌』第2編第5号(明治40年4月)
- 18 前掲註11参照
- 19 前掲註2参照
- 20 前掲註2参照
- 21 「講道館記事」『講道館柔道教師会々報』第1号(明治41年11月)
- 22 後の講道館柔道十段
- 23 前掲註2参照
- 24 「柔道の大本山 新しい講道館を！みんなの力で築きましょう」パンフレット 講道館新築後援会発行
- 25 前掲註24参照
- 26 昭和33年講道館の新築が成った際、その功績から正力らに講道館八段が贈られたが「近代柔道」昭和33年 近代柔道社発行、正力はそれを受け取らず返上している。
- 27 「講道館創立八十周年記念特集」『柔道』第34巻第1号(昭和38年1月)
- 28 「正力さんと武道館」『武道』第45号(昭和42年1月) 日本武道館発行
- 29 頼山陽の言葉
- 《写真典拠》
1. 講道館柔道資料館殿堂より
2. 『闘魂 高専柔道の回顧』湯本修司著 読売新聞社発行 昭和42年
3. 『柔道』第23巻第12号 昭和27年



人間の記録

## 嘉納治五郎

— 私の生涯と柔道 —

三二六頁 ページ

一、八九〇円 (税込・送料別)

嘉納治五郎著 日本図書センター刊

嘉納治五郎の人物・顔見、柔道とは何か、講道館柔道の発展の経緯、嘉納治五郎の偉大な教育家としての抱負とその実力等、嘉納治五郎の研究及び日本の近代化の推移等の研究には見逃さない資料です。



嘉納治五郎

◎お申込・お問い合わせ先

〒112-0033 東京都文京区春日一―六―三〇

講道館総務部

電話 〇三―三八―一一七―一五五